

国立病院機構沖縄病院 院長 大湾勤子 先生



○久志先生 国立病院機構沖縄病院の院長ご就任おめでとうございます。ご就任にあたって今後の抱負をお聞かせ下さい。

○大湾先生 就任にあたっての感想ということですが、正直なところ「えっ、私が院長…」というのが本音でした。私は、琉球大学第一内科から沖縄病院呼吸器内科に1997年に赴任し、勤続26年目を迎えたところでのお役になります。

病院は、まず安全・安心で、良質な医療が提供されるところでなければなりません。同時に、スタッフも働きやすくやりがいを感じて、ベストパフォーマンスを発揮できる職場にしたいと考えています。そのために安定した経営基盤が求められます。そのような病院を目指す院長ですから、「荷が重い」という気持ちが大きく、おめでたいとはとても思えないというのが院長就任の感想でした。ありがたいことに一緒に“重荷”を背負ってくれるスタッフの励ましに支えられ、半年が経過いたしました。

沖縄病院は1948年8月(75年前)に金武町で、沖縄民政府公衆衛生部金武保養院としてスタートしました。沖縄の歴史と共に名称が変わって、1952年に琉球政府立、日本復帰の年の1972年には国立療養所金武保養院となっております。金武町より現在の宜野湾市に1978年12月(45年前)に移転し、国立療養所沖縄病院と名前が変わりました。皆さんにはおなじみの『国療』です。実際には2004年4月(19年前)に独立行政法人化され、国立病院機構沖縄病院という名称に落ち着きました。したがってもう療養所ではないということを改めてお知らせいたします。

現在は11診療科、医師29名。当院の創設の歴史の中で特徴としてきた、セーフティネットとしての筋ジストロフィー、結核診療を担いつつ、これまで力を入れてきた神経難病・筋疾患、肺がん、緩和医療の領域では特に沖縄県で中心的な診療の役割を果たしていきたいと考えています。これらの特徴ある診療が当院のブランドでもありますので、どのような診療が行わ

れているかを発信して、患者さんやご家族、また医療従事者に選んでいただけるよう病病連携、病診連携を強化してまいりたいと考えています。2019年7月には地域包括ケア病棟を開設しましたが、まもなく流行したコロナのために、新型コロナウイルス感染症対応病棟に転用して、2023年9月まで使用しておりました。この期間には現在抗ウイルス薬として使用されているゾコーバの県内唯一の治験参画機関として関わらせていただきました。

2023年10月より地域包括ケア病棟を再開棟しておりますので、地域のニーズに合わせてポストアキュート、ポストサブアキュートの患者受け入れにも力を入れていきたいと考えています。こちらが私の抱負です。

○久志先生 難病医療拠点病院に指定されたということですが、神経内科疾患のみならず、肺がん診療の拠点として重要な役割を果たしていると思いますが、現状と今度の展望をお聞かせください。

○大湾先生 高齢社会の時代にあって、脳神経に関連した変性疾患や肺がんは増加すると言われていています。脳神経内科、呼吸器内科・呼吸器外科の専門医、指導医は県内でもトップクラスだと思っています。神経難病やがんでも診断、治療、生活支援、緩和医療まで一貫して高度で良質な医療が提供できるようにスタッフ一同力を合わせていきたいと思っています。

特にがん診療においては、2023年4月より、高精度放射線治療装置「True Beam」が新規に導入され、迅速で最適な放射線治療の提供が出来るようになりました。緩和治療にもこの放射線治療がお役に立つことがあると思います。当院では入院で治療が受けられるので遠方からの患者さんにとっては安心だということで役立てていきたいと思っています。

神経難病や肺がんの領域では、新薬も増えてきましたのでこれらの導入も積極的に行っております。また呼吸器外科では、医師主導の



肺がん術式の新たな評価の研究にも取り組んでおり、アカデミック活動にも力を入れているので、手術の技術だけではなく、研究についても頑張っています。よき成果を結んでくれるといいなと思っています。

これらの診療は、医師だけではなくコメディカルも一緒に、それぞれの専門性を発揮して充実させていかなければいけないので、患者さんやスタッフ同士がコミュニケーションをとりやすい環境づくりを意識して、チーム医療の強化を考えています。

○久志先生 今後さらに高齢化社会が来ると言われていて、それもあって地域包括ケア病棟を立ち上げたと思いますが、今後の展望についてお聞かせいただけますか。

○大湾先生 新型コロナウイルス感染症の流行を通して、私どもの生活や診療の在り方にいろいろな気づきを得られました。コロナ感染後で廃用症候群になってしまい自宅に帰れない方々の療養先の確保に難渋したご施設は、たくさんあったと思います。今入院が必要な方々に、ベッドが確保できないという事態を出来るだけ回避したい、また可能な限り、ADLを入院前に戻して退院できるようにしたいというコンセプトで、治す医療から支える医療へ目標を広げ、活躍するのが地域包括ケア病棟です。より柔軟に、より生活に密着した対応が求められており、スタッフひとりひとりが力を発揮できるように

士気を高めていきたいというのが希望です。今後も病病連携、病診連携を継続していきたいと思っています。

○久志先生 地域のケアに関して、どれくらいの地域を担当したい等ありますか？

○大湾先生 沖縄病院は中部医療圏に入っていますので、中部でも南側、そして浦添や那覇の北側の方々を対象になると思います。ただし、ご家族がこの近くにお住まいであれば、ニーズに合わせてお受け入れ出来たらと思っています。

○久貝先生 県内で結核患者を中心的に受け入れています。最近の動向についてお聞かせいただけますか。

○大湾先生 全国的に結核の患者数は減っており、沖縄県も同様です。当院は沖縄県において結核治療の中心的な役割を担ってきました。1960年代は最高460の結核病床数を保有しておりましたが、2019年から30床となっております。460から30ということですので50年くらいの間でこれだけ減ったということになりますね。現在は30床の確保病床でも、入院数は多くても15人程度。空床の状態が続いており

ますので、経営的には厳しいこともありますが、歴史的に必要で担ってきたので我々の役割は外せないだろうと思っています。

入院者の年齢中央値は、ここ5年くらいは80歳代と高齢者が多く、その他基礎疾患もあるため、人数は少ないですが、重症の患者さんが多いです。また、若い外国生まれの方もある一定数結核治療を受けています。世界的にも結核の患者は減少していくと思いますが、罹患率の高い国から移住してくる外国生まれの方々への対応はまだしばらく続くと思います。

患者数が減少すると、本疾患に遭遇する機会が少なくなるため、医療従事者の教育機関としての役割も我々は持っているというところで、他の疾患と合わせて重要だと考えています。2020年3月には、沖縄県結核医療中核病院に指定されておりますので、しばらくは結核の診療も担っていきたいと考えています。

○久志先生 県民の期待に応えるためには、沖縄病院として今後どのような医療を展開する予定でしょうか。

○大湾先生 神経・筋疾患、肺がん、緩和医療、セーフティネット（筋ジス・結核）の4本の診療の柱を当院のブランドとして告知していきたいと思っています。そして、働くスタッフ



がひとりひとりプライドをもって専門性を発揮出来るよう、人材の人財化を目指して環境づくりをしたいと考えています。風通しがよく、心理的安全性の高い組織となるよう願って、院長室だよりを毎月、電子カルテの表に短く掲載しています。取り組んでほしいテーマを漢字一文字で挙げています。4月～6月は、患者さん、家族へ敬意を払い、スタッフ間が互いにリスペクトしながら医療を提供できるようにということで【敬】を選びました。7月～9月は、見直し、新しい取り組みを意識して前進するようにということで【再】という漢字でスタッフへメッセージを送りました。10月からは【発】。半年間取り組んできたことを発信して実践することを目指したいと思います。まず職員が、目標をもってやりがいを感じて働くことで、それが患者さん・家族へより良い医療の提供ができ、ひいては近隣地域のみならず県内の医療機関、県民への安心・安全、高度で良質な医療の提供が出来ることにつながることを願っています。しっかりと当院のブランドを固めて、みなさんにお知らせしていけたらと思っております。

そのために、どのような診療をしているのか見える化したいというのが私の希望です。でも私自身はITなど苦手なので、スタッフの力が必要です。良い医療をしているとなれば、県民にもそれが伝わり、求められる病院になることを期待しています。

○久志先生 沖縄県医師会に対してのご意見・ご要望があればお聞かせ下さい。お子さんを育てながら、大変だったことや、次につながる働き方とか、恐らくいろいろなことを経験した先生だから発信出来るということもあると思うのですが。そのようなお話もお聞きしたいと思っています。

○大湾先生 医師も多様な働き方ができるようになりまして、当院は29名の医師のうち9名が女性医師。そのうち7名が子育てをしています。皆さん専門医を取得し、プライドを持って

しっかりやってくれています。医師会の働き方に関する情報提供は非常に役に立っています。

私自身は育休を取るという発想がなく、取る人もいなかったもので、産後すぐに復帰をして仕事をするというイメージでした。当直もあり、やるしかないだろうという感じで。幸い私は協力してくれる家族がいたので出来ました…。今は働き続けるための制度は整備されてきていると思います。男女共にお互いを尊重してライフステージに合った支援を利用できる環境作りが大事です。医師会はそういう情報提供や働きかけをしてくださっているので、参考にしています。

各地区医師会の取り組みや、医師会が主催するイベントの情報提供も私どもの診療に役立っていて、医学会などの教育活動などにも参加し、学びのチャンスを得ています。

一方で働き方が多様となり、情報収集も個人で入手できるようになってきたため、組織力をあえて望まないという医師も増えてきているのではないかと思います。しかし、医師の困りごと、発案などが大きなムーブメントを起こすこともあり、今後は若い学生や研修医など、柔軟で新しい発想を取り込むことができれば良いなと希望しております。

私は医師会の組織力アップメンバーになっているのですが、国療沖縄医師会自体は小さな医師会なので、ほとんどが当院の先生だけで成り立っています。この前、卒業して間もない若い先生たちに、医師会がどんな働きをしているかを玉城研太郎先生が医学部の授業でお話されていました。銘苺桂子先生は女性の働き方についてお話されていて、医師会として多様だけれどもこんな良いものがあると情報提供しています。このような取り組みを続けていると、また新しい発想などが出てくるのかと思っています。組織力というのは、何かを発言していく上では必要だと思っています。

○久志先生 最後に日頃の健康方法、趣味を教えてください。

○大湾先生 寝ることですね。とにかく寝る時間を確保するようにしています。

趣味は、最近は行けていませんが、海外旅行ですね。20年弱前からコロナが起こる前までは毎年1～2回は海外に行っており、20ヶ国以上行きました。それが唯一の楽しみだったのですが、コロナになってからは全然行けず…来年以降にまた行けたらいいなと思います。

○久志先生 先生、運動もしていませんか？

○大湾先生 ヨガをやっていましたが、コロナが流行って一変しました。コロナの期間は3年近く休まずに働き続けていたので、時間の感覚がおかしくなっておりとても変な感じでした。ようやく落ちついてきたので少しゆっくり出来るといいなと思っています。

P R O F I L E

1979年 沖縄県立那覇高等学校 卒業
 1987年 琉球大学医学部医学科 卒業
 1987年 琉球大学第一内科 入局
 1991年 琉球大学大学院 医学研究科博士課程 修了
 1997年 国立病院機構沖縄病院 (旧国立療養所) 呼吸器内科
 2004年 国立病院機構沖縄病院 緩和医療科 医長
 2014年 国立病院機構沖縄病院 副院長
 2023年 国立病院機構沖縄病院 院長

○久志先生 座右の銘などはありますか？

○大湾先生 「一事一心」一つのことを心を込めて全力投球していきたいと思っております。でも楽しく、リラックスして。たくさんの方々に助けてもらっていて感謝しています。

○久志先生 本日はどうもありがとうございました。

インタビューアー：広報委員 久志 一郎

原稿募集

プライマリ・ケアコーナー (2,500字程度)

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。
奮ってご投稿下さい。

随筆コーナー (2,500字程度)

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。
なお、スポーツ同好会や趣味の会(集い)などの自己紹介や、活動状況報告など、歓迎いたします。